

令和8年度 徳島県教育会研究主題

研究主題

VUCAの時代を乗り越え、心豊かにたくましく生き抜く人財の育成

― 未来へつなぐ教育環境を創造し、一人一人のウェルビーイングを高める教育の推進 ―

主題設定の趣旨

現在、私たちが直面している社会は、VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）の時代と言われている。AIをはじめとした情報技術の進展やグローバル化、気候変動、人口減少など、それらの変化のスピードとその複雑さは日々増しており、これからの時代を担う子どもたちには、今後どのような状況においても、主体的に判断ができ、しなやかに対応できる力が求められている。そのような中、子どもたち一人一人が心豊かに、そしてたくましく生き抜く力を備えた人財として成長していけるよう、私たちは教育の在り方についての考えを日々アップデートしていかなければならないという思いを込めて、研究主題とサブテーマを昨年度と同様のものとした。

この研究主題は、言うまでもなく、全ての子どもが自らの可能性を信じ、幸福感や満足感を感じながら学び、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となり得るよう、その資質・能力を育成を目指すものである（詳細は、第4期教育振興計画、徳島教育大綱参照）。そのための方策として重視したいのが、「令和の日本型教育」^{*1}で示されている「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実である。前回（平成20・21年告示）の学習指導要領のキーワードにあった「個に応じた指導」は、教師視点からの考え方で、これを学習者視点から捉えたと「個別最適な学び」と整理できる。すなわち、これは、子どもたち一人一人の興味・関心、学習進度や理解の深さに応じて、最適化された学習機会を保障するものであり、まさに、“誰一人取り残さない学びの実現”に向けて必要な取組である。また、「協働的な学び」は、仲間と関わり合い、意見を交わし合いながら、互いの考えを深め合う学習スタイルである。子どもたちはこうした取組を通して多様な価値観に触れ、自己と他者の違いを認め合い、共に課題解決に向かう力を養っていくものと考えられる。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還させながら、一体的な充実を目指すことで、質の高い深い学びが可能となる。

その際に、これらの学びを支える上で重要なのが「自己調整力」の育成である。「自己調整力」は、授業の振り返りを通して、自らの学びの目標を設定し、計画を立て、次のステップへと各自がつなげていく力であり、「個別最適な学び」に向かうための大切な要素である。この力を育むことにより、子どもたちは、受け身の学びから脱却し、今の自分にとっての課題を発見し、主体的に課題に取り組む姿勢が身に付いていくであろう。そして、この経験の積み重ねが、やがて社会で直面する多様な課題にもしなやかに対応できる、自立した人間へと成長していくための土台となるものと期待したい。

以上のような学びを実現するためには、当然のことながら、子どもたちが安心して学びに向かえる教育環境の整備が不可欠である。人とのつながりや達成感を通して得られる「ウェルビーイング」は、学習意欲や社会性の育成に繋がるものと確信する。教育活動を通して子どもの心と体の健康を支え、自己肯定感を高めることは、VUCA時代をたくましく生き抜く基盤となるものである。本研究を通して、全ての子どもが自らの力を信じ、自分らしく社会に貢献できる人財へと成長していけるような教育実践が、全ての学校・園で実践されることを願い、本主題を設定した。

^{*1} 令和3年1月26日に中央教育審議会が取りまとめた、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）